

『伝光録』の成立(五)

東 隆 眞

六、伝光録の伝承過程について

『伝光録』の成立について、従来の史料を検討すると、その伝承過程に、かなり長期にわたる空白期間があるから、瑩山禅師の語録とするこ
とには難点があるとする佐橋説と、その同じ史料によって、すでに室町
時代には、『伝光録』の請益、書写が行われていたことを傍証できると
して可信性を主張する田島説を、先に紹介した。

この相反する両説を念頭におきながら、ここで『伝光録』の伝承過程
について、以下、改めて吟味してみよう。

『伝光録』が、正安二年(一一三〇〇)正月十一日から、加賀の大乗寺
において、参学の門人たちに提唱した説法を、侍者が編録した。現存最
古の乾坤院本(永享年間写)をはじめ、現存する写本の二六本あまりの
巻頭に、このことは共通して一様に記録するところである。

そして、安政四年(一一八五七)、仏洲仙英(一一七九四—一八六四)が、は

じめて木版本として公刊した。

乾坤院所蔵筆写本と仏洲仙英開版本の間には、約五五〇年の年数が
ある。

このおよそ五五〇年間、『伝光録』の伝承過程はどのような状況で推
移してきたかについて現時点で、整理してみると、おおよそ次のとおり
である。

まず、『伝光録』は、直前にも挙げたように、正安二年(一一三〇〇)
正月十一日、侍者の速記録的編録の作業を起点として成立するのであ
る。そして、この場合、『伝光録』の原形が成立するには、かつて紹介
しておいた故児玉達童博士の「私は太祖が大乗寺法堂に若干のメモを手
に(或は胸に)自由に大衆を相手に獅子吼せられる姿を想像する」とい
う意見(拙稿『伝光録』の成立(三))がすぐる重要であると思われる。
少くとも、『伝光録』各章の初めの部分に必ず掲げられている祖師の大
悟の機縁ならびに略伝の部分は、なんらかのメモも資料も準備しないま

ま、徒手空拳で提唱されうるわけがない。必ず草稿にもとずいてなされたに相違ないと見るのが常識的であろう。

果して、これまた、すでに紹介しておいたが、瑩山禪師真筆の『伝光録』の草稿本なるもの一部が、明治三十一年（一八九八）五月一〇日の時点で現存していたことが確認され、曹洞宗内に公示されている。この草稿本のその後の行方は不明であり、実体もつまびらかにされていないが、今後、発見される可能性がないわけではない。むしろ、数百年後に忽然と姿を現わすことは、この種の写本の場合、しばしば見かけることである。それゆえ、この公示がある以上は、いま見付からないからとて、早軽な判断を下すことは、敢に慎まなければならないであろう。

『伝光録』の最古写本は、永享年間（一二四二—一二四四）、尾張の乾坤院三世芝岡宗田（一一五〇—一二〇〇）の書写本である。

乾坤院本を詳さに検尋すると、これまで指摘しておいたように、いま重要な点は、「聞き書き」としての表記がきわめて濃厚であることと、「見せ消ち」現象が見られることである。

このことは、芝岡宗田が、提唱本としての原形態をそなえた原本を忠実に謄写したことをあらわしており、そしてまた、とりもなおさず、乾坤院本を先行する写本があったことを証明するものである。換言すれば、芝岡宗田は、それ以前に成立していた写本を、そっくりそのまま書写したはずである。それが、この乾坤院本である。乾坤院本が存在するということは、乾坤院本以前の写本が存在していたのである。芝岡宗田が『伝光録』を創作したのではないのである。それゆえ、正安二年から

永享年間までの約一三〇余年間を連繫する写本の存在が傍証できるわけであるから、佐橋師のように、この間、つまり一四世紀は、伝承過程の時間的空白があるというのは、当をえないのである。

芝岡宗田とほぼ時期を同じくして、青岑珠鷹（一二三六—一四七二）が宝徳三年（一二四二）、越中の河南荘で、『伝光録』六冊本を書写し、請益したということが、『草創禅勝山竜門寺記』、『竜門開山青岑和尚伝』に記録されている。この記事によって、伝承過程の一端を証明しようとする田島説と、この記事の信謬性を否定する佐橋説とが並立していることは、前章でくわしく紹介したとおりである。

田島博士は、『草創禅勝山竜門寺記』、『竜門開山青岑和尚伝』の記事を、文字どおり一点の疑いもさしはさまず、そのまま採用しているのであるが、田島説がより強固なものとなるには、青岑珠鷹の書写本が登場するか、あるいは間接的な証明となる資料がのぞまれるところである。それがかなわぬ現段階では、田島説には、若干の弱点があるといわなければならない。

田島説に対するに、佐橋師は、『草創禅勝山竜門寺記』、『竜門開山青岑和尚伝』の記事を分析して、これに疑難をさしはさんでいる。しかし、この疑難は、一言以って評すれば、かなりの無理があるのではないかと思われる。

『草創禅勝山竜門寺記』（延室八年（一一八〇）九月、竜門寺二〇世久幡撰）のなかにある「師（青岑）者宝徳三年（一一八三）請益伝光録、自筆而書了也」の一段について、佐橋師は、この記事には、青岑が『伝光録』を

書写したということだけを記して、同寺に写本の現物が襲蔵されているとは言っていないという意味のことを述べている。

なるほど、そのとおりであろう。しかし、視点をかえてみると、久幡が、竜門寺に住職して、この『草創禅勝山竜門寺記』を記録した時点で、宝徳三年に青岑が書写した『伝光録』の写本が現存しているからこそ、あえて、その形態や襲蔵のことに触れて詳記しなかったのではないかと考えられる。住職久幡にとって、自明の事実をことさらに行々しく記す必要はないからである。第一、『草創禅勝山竜門寺記』なる文書は、『禅勝山竜門寺開山代代記曆』をのぞく、全篇九三〇余字、四百字詰原稿用紙で二・五枚程度の短文である。佐橋師が、竜門寺開山の青岑が書写した『伝光録』ほどの禅書が、実際に同寺に襲蔵されているのであれば、その写本の相状などを明記しておくのが寺誌の当然の態度であるのに、そのことが見えないのは、当時の竜門寺には書写説だけが伝えられて、写本は存在しなかったことを思わせるというのも、いささか強弁にすぎないか。『草創禅勝山竜門寺記』は、直前にもいうとおり九三〇余字の短文のうえ、その内容は、竜門寺開創ならびに、開創を核とする青岑の略伝、竜門寺の開基、外護者、太源門派における竜門寺の位置づけなど、多方面の事項を摘要したものであって、『伝光録』の伝承について記録することを狙いとしたものではない。記録するかしないかは、撰者久幡の主観ないし判断にかかわる問題であろう。いま、久幡は、記載しなかっただけのことである。それゆえ、『草創禅勝山竜門寺記』に青岑書写本『伝光録』の詳細が紹介していないからといって、『伝

光録』が存在しないと推論するのは、勇み足である。けだし、寺記、僧伝の類に、存否を求めるのは、寺誌、僧伝の資料としての基本的性格を見ない者である。寺誌、僧伝は、参考資料にはなりえても、不可欠の証拠とはなりえない。

むしろ、『草創禅勝山竜門寺記』のような寺誌に、『伝光録』の記事があるのはきわめて稀な例というべきであって、およそ凡百の曹洞宗寺院の寺誌や僧伝に、『伝光録』や『正法眼蔵』そのほかの宗典の形態、現状、現存の有無は詳記することがないのが、一般であり、通例である。決して珍しいことではない。

また、佐橋師は、『草創禅勝山竜門寺記』よりおくれること四六年の享保十一年（一七二六）、竜門寺二六世華岳雲寿の撰になる『奥州磐城禅勝山竜門禅寺記』には、青岑の書写本『伝光録』については、一切関説することがないから、はじめから竜門寺にはなかったことを意味しているといわざるをえないというが、これは、直前にも論評したように、やや短絡にすぎるのであって、寺史の記載の有無によって一概に決めつけることはできないのである。『伝光録』の存否について記載するかしないかは、撰者雲寿の『伝光録』に対する関心ないし認識の程度如何にもよるであろう。享保十一年の時点で、竜門寺に青岑書写の『伝光録』は秘蔵されていたかも知れないし、いなかったかも知れない。しかし、そのいずれかを、寺誌の記載内容だけに求めるのは、無理だといえるのである。記載しないから存在しないというのは、独断的推理にすぎない。

更にまた、佐橋師は、無署名、年記のない『竜門開山青岑和尚伝』は、

『奥州磐城禅勝山竜門禅寺記』より後代の成立を推定し、そのうえで、『竜門開山青岑和尚伝』には、青岑の書写した『伝光録』六巻のうち二巻が竜門寺に現存しているという趣旨の記事があるのを取りあげ、『奥州磐城禅勝山竜門禅寺記』が全く触れていないのに、その後になって、忽然として、『竜門開山青岑和尚伝』にこのような記事が登場するのは、不可解であるという。加えて、『竜門開山青岑和尚伝』が、六巻本の『伝光録』を忽然と出現させ、忽然と消滅させた犯人であるという。

しかしながら、まず『竜門開山青岑和尚伝』が『奥州磐城禅勝山竜門禅寺記』以降の成立に属するものかどうかが問題であるが、それはいま問わないにしても、『竜門開山青岑和尚伝』に忽然と出現したと決めつけるのは、大きな矛盾であり、自家撞着である。なぜかといえば、すでに、『草創禅勝山竜門寺記』には記載されていること自体を、佐橋師自身認めているからである。第一、『竜門開山青岑和尚伝』は、なぜ、佐橋師がというような記事を捏造しなければならなかったのか。師は、この点については一切触れていないから、一片の臆測にとどまるというべきであろう。むしろ、『竜門開山青岑和尚伝』の撰者は、この『草創禅勝山竜門寺記』の『伝光録』青岑写本の事項を再びとりあげて、『奥州磐城禅勝山竜門禅寺記』の欠けたところを補って、『伝光録』青岑写本の現状を記録したと判読してよいのではあるまいか。嶺南秀恕の『日本洞上聯燈録』に、青岑の『伝光録』書写を記録していないのは、史実として採用しなかった証拠だというが、もしそれを言うならば、芝岡宗田の場合はどうか。『日本洞上聯燈録』には、芝岡宗田の略伝が記載されて

いる。芝岡宗田は、『正法眼蔵』七五巻、『伝光録』二冊を書写している。今日では、この『正法眼蔵』は、七五巻本系統の写本としては、完全本としての最古の写本であり、『伝光録』もまた最古の写本の位置を占める貴重本である。しかし、『日本洞上聯燈録』は、このことに全く関説していない。だからといって、芝岡宗田の『正法眼蔵』七五巻本、『伝光録』二冊本を書写した事跡を否定することはできないではないか。

要するに、寺史や僧伝の一言半句の有無を取りあげて、『伝光録』書写の史実の有無を論ずることは、きわめて不用意な態度といふべきである。

上来、佐橋説に対する私見の一端を述べるのに、やや贅言を費やしたが、論点を戻して、『伝光録』の写本群に目を転ずることにしよう。

安政四年（一八五七）、仏洲仙英が『伝光録』を木版本に上梓するにあたって校合に用いた写本は、その凡例によると、旅僧から譲与された五冊本、大乘寺所蔵二冊本、永光寺所蔵五冊本、その他数種となっていた。即ち、仏洲仙英は、三、四種の写本を被見したと推定される。

昭和十五年（一九四〇）、故横関了胤師が『異文対考 伝光録詳解』を公刊するにあたって、同師が校合した写本は、永光寺所蔵五冊本、松山寺所蔵二冊本、当闡筆写本、その他となっている。松山寺所蔵本、当闡筆写本が新しく加わったのであるが、当闡本は目下、所在不明である。

ついで、昭和三十七年（一九六二）、駒沢大学図書館刊『新 禅籍目録』には、乾坤院所蔵二冊本、松山寺所蔵二冊本、長円寺所蔵五冊本、永光寺

所蔵五冊本、永久岳水博士所蔵四冊本、永平寺所蔵二冊本、石川俊康師所蔵六冊本、南極筆写本、大昌寺所蔵四冊本の所在を明記している。乾坤院所蔵本、長円寺所蔵本、永久博士所蔵本、永平寺所蔵本、石川俊康師所蔵本、南極筆写本、大昌寺所蔵本が加わったのである。

昭和四〇年（一九六五）、永久岳水博士の『伝光録物語』には、乾坤院所蔵二冊本、長円寺所蔵五冊本、松山寺所蔵二冊本、永光寺所蔵五冊本、永平寺所蔵二冊本、永久岳水博士所蔵二冊本、南極筆写本、大昌寺所蔵四冊本、東隆真所蔵五冊本を紹介している。東隆真所蔵本が新添された。

昭和四五年（一九七〇）東隆真は、『乾坤院本伝光録』（復刻、校註）を刊行したが、乾坤院所蔵二冊本、松山寺所蔵二冊本、長円寺所蔵五冊本、永光寺所蔵五冊本、永久博士所蔵二冊本、南極筆写本、大昌寺所蔵四冊本、東隆真所蔵五冊本のほかに、河林孝道博士所蔵五冊本の現存を紹介している。

昭和四八年（一九七三）、『続曹洞宗全書』刊行のための調査において、前記九種の写本に続けて、天林寺所蔵一冊本、導故寺所蔵三冊本、永昌院所蔵二冊本、松源寺所蔵五冊本、可睡齋所蔵三冊本、浄空院所蔵五冊本の七種写本、合計一六種の写本の存在が確認された。

昭和五三年（一九七八）、『禅学大辞典』は、右に加えて、新出の法正寺所蔵五冊本、竜門寺所蔵五冊本、東漸寺所蔵五冊本の一九種写本を報告している。

このほか、昭和六〇年八月の現段階では、管見の及ぶかぎり、西明寺

所蔵五冊本、徳泉寺所蔵五冊本、見性寺所蔵二冊本、瑞泉寺所蔵四冊本、永沢寺所蔵五冊本、古書目録本の新出写本の所在が確認されているから、都合二五種の写本が現存するわけである。

このように、『伝光録』の写本は、仏洲仙英以降、一〇〇年あまりの間に、全国各地から、主として曹洞宗寺院から、続々と発見され、その所在が報告されてきているのである。この傾向は、今後も、一層増大するであろうことはまちがいない。しかし、これら諸写本に目を通した学者は、管見では、現在のところ、一、二にすぎないようである。いわゆる、真偽を論ずる者において、諸写本を縦覧した者は、皆無である。

ところで、ここで、あらためて、私が直接に確認しえた現在の写本を筆写年代順に、列挙しておこう。

乾坤院（愛知県知多郡東浦町緒川字沙弥田八）所蔵（愛知学院大学図書館委託）二卷二冊本

伝光録（外題）

紹瑾大和尚住能州洞谷山永光寺語録（内題）

芝岡宗田（乾坤院第三世）等写 永享二年（一四三〇）以降

龍門寺（石川県七尾市小島町リ部一五）所蔵 五卷五冊本

伝光録（外題）

紹瑾大禅师住能州洞谷山永光寺語録（内題）

詰叟芳賢（龍門寺第三世）等写 天文一六年（一五四七）

松山寺（石川県金沢市東兼六町五一六）所蔵 二卷二冊本

瑩山和尚洞谷録（外題）

紹瑾大和尚住能州洞谷山永光寺語録（内題）

融山泉祝（松山寺開山）写 慶長四年（一五九九）～寛永四年（一六二七）

（二七）

長円寺（愛知県西尾市貝吹町入一〇一）所蔵 五卷五冊本

伝光録（外題）

紹瑾大和尚住能州洞谷山永光寺語録（内題）

暉堂宋恵（長円寺二世）写 寛永一四年（一六三七）

西明寺（愛知県豊川市八幡町寺前）所蔵 五卷五冊本か（第三冊、第五冊のみ現存）

（五冊のみ現存）

伝光録（外題）

天川吞堯（愛知県広済寺第十一世）写 寛文八年（一六六八）

天林寺（静岡県浜松市下池川町二七一）所蔵 一卷一冊本

伝光録（外題）

紹瑾大和尚住能州洞谷山永光寺語録（内題）

揚堂嚴策（天林寺第一三世）写 元禄九年（一六九六）

永光寺（石川県羽咋市酒井町イ部一一）所蔵 五卷五冊本

伝光録（外題）

紹瑾大禅師住能州洞谷山永光寺語録（内題）

雪溪安宅（永光寺第四八五世）写 正徳五年（一七一五）

瑞泉寺（愛知県名古屋市中緑区鳴海町相原町四）所蔵 四卷四冊本（ただし第三七祖章より第五二祖章までを欠く）

瑩山和尚伝光録（外題）

瑩山和尚伝光録（内題）

吞舟透鱗（瑞泉寺第二〇世）写 延享二年（一七四五）

永平寺（福井県吉田郡永平寺町志比）所蔵 二卷二冊本

伝光録（外題）

大乘二世瑩山紹瑾大和尚伝光録（内題）

江寂円月（永平寺第四二世）等写 延享三年（一七四六）

故永久岳水師（神奈川県横浜市磯子区竜珠院住職）所蔵 四卷四冊本

瑩山禅師伝光録（外題）

大乘二世紹瑾大和尚伝光録（内題）

端倪写 延享四年（一七四七）

山端昭道師（群馬県高崎市赤坂町三〇）所蔵（山形県石川俊康師旧蔵） 六卷一冊本

瑩山和尚伝光録（内題）

無禪写 宝曆七（八？）年（一七五七（八））

河村孝道師（東京都港区高輪二―十一―一）所蔵（宮城県伊勢修成師旧蔵）五卷五冊本

瑩山和尚伝光録（外題）

大乘二世紹瑾和尚伝光録（内題）

海巖寂靜写 明治四年（一七六七）

永昌院（山梨県山梨市矢来）所蔵 五卷二冊本

大祖弘徳円明国師伝光録 太祖伝光録（外題）

瑩山和尚伝光録（内題）

元山南極（滝川寺第一一世）写 明和四年（一七六七）

東隆真（東京都三鷹市大沢二―十一―十五）所蔵 五卷五冊本（ただし第二冊と第五冊は別人の筆写）

瑩山伝光録、瑩山和尚伝光録（外題）

瑩山和尚伝光録（内題）

玉洲大泉（ただし第二冊―第五冊）写 寛政五年（一七九三）（第一冊、筆写者不詳）文化二年（一八〇五）（第二冊と第五冊）

大昌寺（長野県上水内郡戸隠村栃原三〇八二）所蔵 四卷四冊本

伝光録（外題）

大乘二世瑩山紹瑾大和尚伝光録（内題）

瑞応聖麟（大昌寺第九世）写 寛政七年（一七九五）

永沢寺（愛知県豊田市篠原町寺洞）所蔵 五卷五冊本

伝光録（外題）

紹瑾大禪師住能州洞谷山永光寺語録（内題）

円戒玄成（永沢寺第二六世）写 文化一〇年（一八一三）と文化十一年（一八一四）

可睡斎（静岡県袋井市久能二九一五―一）所蔵 四卷三冊本（ただし第一巻を欠く）

瑩山国師伝光録（外題）

瑩山和尚伝光録（内題）

智賢写 弘化二年（一八四五）

法正寺（新潟県新発田市大字荒川）所蔵 五卷五冊本

大乘室中瑩山和尚伝光録（外題）

瑩山和尚伝光録（内題）

仏母大広写 明治五年（一八七二）

見性寺（兵庫県出石郡出石町松村一四七）所蔵 二卷二冊本

瑩山和尚伝光録（外題）

瑩山和尚伝光録（内題）

筆写者、年次は不詳

東漸寺（愛知県宝飯郡小坂井町）所蔵 五卷五冊本

瑩山和尚伝光録（外題）

瑩山和尚伝光録（内題）

筆写者、年次は不詳

松下圭道師（山形県鶴岡市大字山田丙六二）所蔵 五卷五冊本

伝光録（外題）

瑩山和尚伝光録（内題）

筆写者、年次は不詳

導故寺（京都府京都市上京区御前通下立売上ル仲之町二八九）所蔵

三卷三冊本

瑩山和尚伝光録（内題）

筆写者、年次は不詳

松源寺（島根県安来市安来町一四四六）所蔵 五卷五冊本

瑩山和尚伝光録（外題）

筆写者、年次は不詳

浄空院（埼玉県東松山市上唐子六七九）所蔵 五卷五冊本か（第二卷以降を欠く）

瑩山和尚伝光録（内題）

筆写者、年次は不詳

徳泉寺（新潟県上越市東雲町二―三―一九）所蔵 五卷五冊本

瑩山和尚伝光録（外題）

瑩山和尚伝光録（内題）

筆写者、年次は不詳

これによってみれば、一五世紀成立の筆写本（乾坤院本）一件、一六世紀成立の筆写本（竜門寺本、松山寺本）二件、一七世紀成立の筆写本（長円寺本、西明寺本、天林寺本）二件、一八世紀成立の筆写本（永光寺本、瑞泉寺本、永平寺本、故永久岳水師本、山端昭道師本、河村孝道師本、永昌院本、東隆真本、大昌寺本）九件、一九世紀成立の筆写本（永沢寺本、可睡斎本、法正寺本）三件となっている。一八世紀の筆写本がもつとも多く残存して、発見されている。そのほか、筆写者、年次不詳の写本も、ほとんど悉く江戸時代の成立と推測して、大きな誤差はあるまい。

また、これら写本の所在地は、北陸地方（石川県、福井県）東北地方（山形県）東海地方（愛知県、静岡県）信越地方（新潟県、長野県）その他となっており、なかでも曹洞宗寺院の最多数地域である愛知県におい

て、もっとも多く筆写され、もっとも多く所蔵されていることが明らかである。

また、比較的筆写年時の古い写本に見られる特徴であるが、それぞれの寺院の所蔵本は、それぞれの寺院の住職が筆写したものである。乾坤院本、竜門寺本、松山寺本、長円寺本はもとより、ややおくれる天林寺本、永光寺本、瑞泉寺本、永平寺本、大昌寺本なども、同様である。

また、これら筆写者は、瑩山禅師の『伝光録』とともに、道元禅師の『正法眼蔵』あるいは『正法眼蔵随聞記』もあわせて筆写している。たとえば、芝岡宗田（乾坤院本）は、長享二年（一四八八）から明応四年（一四九五）あたりに、『正法眼蔵』七五巻本を筆写し、暉堂宋恵（長円寺本）は、寛永一二年（一六三五）に、『正法眼蔵随聞記』を筆写し、瑞応聖麟（大昌寺本）も、寛政七年（一七九五）に、『正法眼蔵随聞記』を筆写していることは、興味深い史実である。ここには、道元禅師の撰述や語録とともに瑩山禅師の『伝光録』を尊重していた法孫としての自負と使命観を看取することができよう。（追記。「宗宝調査委員会調査目録及び解題」50曹洞宗宗宝調査委員会「曹洞宗報」第六〇一号）の報告によれば、熊本県菊池市竜門大字班蛇口字鳳来 鳳儀山聖護寺に、『伝光録』筆写本（前半二冊）が収蔵されている。次のような記事である。

「伝光録 筆写本 前半二冊

筆者名・筆写代不詳。『伝光録』（天）

「春水満四沢」の冊子には首章から第十三祖章まで、同上（地）

「夏雲多奇峯」の冊子には第十四祖章から第二十七祖までを収めている。恐らく四冊本中の前二冊であろう。首章をみるに、他の筆写本にある錯簡が認めら

れる。従って、この時点で、総計二六種の写本が確認されていることになる。ところで、これら写本は、写本から写本へと伝写されてきたのである。そのことは、同時に伝写の系統を知る手がかりともなるわけであるが、いま伝写の事実を証する事例を、参考までに一、二挙げておこう。現存最古の愛知県乾坤院所蔵本の第三八祖洞山悟本大師章の末尾は、

微ニ幽識非情執 平日今日伊説熾然 請益示衆一

となっている。

「微ニ幽識非情執 平日今日伊説熾然」は諸本共通であるが、続く「請益示衆曰」は、乾坤院所蔵本特有の五字である。

この乾坤院所蔵本特有の「請益示衆曰」の五字は、愛知県長円寺所蔵本に見られる。長円寺所蔵本第三八祖洞山悟本大師章の末尾は、

微、幽識非情識 平日今日令伊説 請益示衆曰

となっており、「請益示衆曰」の五字がある。

右の一事によって、乾坤院所蔵本を伝写したのが長円寺所蔵本であることが、明白である。

いま一つあげておくと、山梨県永昌院所蔵本の第五巻末には、「題号訂誤」、「旧本錯簡」と題して、題号の適否と本文の錯簡を指摘し、これを是正している。次のとおりである。

余カ所持ノ元本ハ、総持ノ秘庫ヨリ出ツ、其題号ハ紹瑾大和尚住能

州洞谷山永光寺語録ト記セリ、拝覽スルニ此ノ録ハ、瑩師大乘会裡ノ
示誨ナル事、章中分明也、洞谷録トナスモノハ後人ノ誤也、今ノ本ノ
題号瑩山和尚伝光録ト記スルハ、石州永明寺拙堂安晏公ノ本ニヨルモ
ノナリ、晏公ノ本ハ宇治興聖寺室中ニ秘在セシヲ、一百年前、一竿堂
公ノ写本ニ因ルト云、

旧本錯簡

一、釈迦ノ章二葉ノ下面、瞿曇ノ諸人ト共ニ成道スルカ云ヨリ、同三
葉ノ上面、一隻眼ヲ具スト云ニ至テ、都テ九行余、第九祖章末、此因
縁ヲ指説セントスルニ卑語有リ、大衆ト云下ニ雜入ス

一、同章三葉ノ上面、然リト云ヘドモ我ト与ト一粒ニ非スト云ヨリ、
結語ニ至テ都テ五行余、釈迦尊ノ章、二葉ノ下面、且問スト云下ニ雜
入ス

一、第二十二祖ノ章ノ末、耳ヲ塞テ聞ザラントスト云ヨリ、結語ニ至
テ都テ六行余ハ、第二十一祖ノ章四葉ノ下、面或ハ人ノ言ニ、因テ迷
ハザレト云フ下ニ雜入ス

一、第四十二祖ノ章初葉、法衣ヲササクト云ヨリ、遠方辺地ノ人ト嫌
フ事勿レト云ニ至テ、都テ七十一行、第四十一祖ノ章三葉ノ上、面次
ニ須ク無為、無事ト云下ニ雜入ス

如上ノ錯誤、今是ヲ考ヘ改テ、元文ニ復版ス、義理柄焉、拝覽ノ者
マサニ知ルベシ

此ノ伝光録ハ、和州吉野郡北山ノ庄桑原村滝岩山寺現住果峯和尚所持
ノ本也、果峯和尚ハ越後国種月寺伯喆和尚ノ法孫ニテ宗和尚ノ嫡嗣

タリ、予、北山小瀬村滝川寺ニ住シ、此ノ本ヲ拝写シ、時ニ明和四丁
亥年極月吉辰 南極

いま、紙幅の都合によってその本文を揭示することを止めるが、右の
「題号訂誤」、「旧本錯簡」の記事は、東隆真所蔵本、松下圭道師所蔵
本、松源寺所蔵本の巻末にも見える。全く共通した記事である。導故寺
所蔵本もこれに準ずる。したがって、東本、松下本、松源寺本、導故寺
本は、永昌院本もしくはその系統の写本を伝写したのである。

こうして、『伝光録』写本は、それぞれ先行する写本を伝写し、改訂
を加えるなどして、相承してきたのであって、ある時代に、ある場所
で、ある人が突如として、単独に、登場させたのではないことがわか
る。なぜ、そのような自明の理をのべるかというと、まえにも言うよう
に、仏洲仙英が木版本を公刊した直後から、『伝光録』は江戸の後期に
製作された偽書であるとか、ついには仏洲仙英の捏造にかかわるもので
あるとの邪推が、宗門の一部に流れたことがあるからである。しかし、
写本が二〇数種も続々と発見され、江戸期をさかのぼる室町時代に書写
された乾坤院所蔵本の確認がなされている今日となつては、このような
流言飛語の誤りは、この際、重ねてはつきりと否定しておかなくてはな
らない。

そこで、『伝光録』写本が伝写相承される過程において、どのような
特徴が見られるかという点である。それは、先に結論をのべておくと、
『伝光録』は、乱りに他見や借し出しを許さない秘書として伝写保管さ

れてきたということである。

たとえば、松山寺所蔵本の識語には、

「永伝_ニ当寺_一為_ニ重宝_一也、乱不_レ許_ニ他方借入_一也」「誰以_ニ各住持之殊勝_一、豈得_レ容易讓_ニ他手_一也」とあり、

長円寺所蔵本の末尾には、

「此秘録書認歟」とあり、

天林寺所蔵本の末尾には、

「当山住持於室中看徳納得也、雖為近左右侍者不及看見也、猶又他見借用隨身弟子等不見也」とあり、

永平寺所蔵本の末尾には、

「久秘在椶樹林中」、「本山之法庫納之、什物篋悉記載、不朽之為珍書者矣」とあり、

山端昭道師所蔵本の末尾には、

「室中秘書都合三卷」とあり、

山梨県永昌院所蔵本（東本、松下本、松源寺本、導故寺本）の末尾には、

「総持ノ秘庫ヨリ出ツ」「宇治興聖寺室中ニ秘在セン」とあり、

導故寺所蔵本の首頭には、

「稟持杉峰之秘本也」とある。

ちなみに、版本を見ると、仏洲仙英開版本には、無隠道費の序文があるが、なかに「盖大乘室内秘本也」とあり、

仏洲仙英が記した凡例には、

「大乘ノ秘本」、「洞谷ノ秘本」、「秘在」、「諸方ノ秘本」などの語句を散見する。

明治一八年（一八八五）本山（大本山総持寺）版『伝光録』に、明治九年（一八七六）の同本山独住第一世諸岳奕堂の重刊発凡を載せて、

「古来、諸山の宝庫に秘蔵して、軽しく世に示さず」とある。

したがって、総持寺第五世大容梵清が『伝光録』に関する業績を残していないからといって、その一事のゆえに、その当時、大容梵清は『伝光録』の存在を知らなかったとは言うことができて、『伝光録』が存在しなかったとは考えられないであろう。例えば、直前に挙げた永昌院所蔵本の第五巻末には、「余カ所持ノ元本ハ、総持ノ秘庫ヨリ出ツ」とあるように、いつの時代かは確定できないまでも、曾って『伝光録』は総持寺の秘庫に秘蔵されていたことがうかがわれるのである。この点においても、佐橋師の説は、早計に過ぎるのではないか。

（未完）